

七ヶ浜町活性化に関する提言

～東北で一番小さい町を、活気日本一の素晴らしい町にするために～

提言者： 汐見小学校 グループ1

木村奏太議員、佐藤光莉議員、佐藤陸議員、山田明愛議員、我妻陽希議員

1. 提言の背景と目的

現在、七ヶ浜町には多くの観光客が訪れていますが、その大半が夏に集中しています。私たちの調査では、汐見小学6年1組の半数以上が「夏以外に海に行ったことがない」と回答しており、年間を通じた集客が課題となっています。そこで、「夏以外の観光客増加」と「町の特産品のPR」を軸とした、町を元気にするための3つの施策を提言します。

2. 提言内容

① 四季を通じて海を楽しめるイベントの開催

「夏だけの海」というイメージを払拭するため、年間を通じて海に足を運ぶきっかけを作ります。

- 春：桜クルーズの実施
- 夏：海水浴
- 秋：ビーチコーミング（海岸の漂着物拾い）の開催
- 冬：初日の出の鑑賞イベント

② 季節や特産品をモチーフにした新キャラクターの作成

既存のキャラクターに加え、子どもたちがより親しみやすく、共感できる新しいマスコットキャラクターを導入します。

- コンセプト：春や冬の季節感、または町の特産品をモチーフにします。
- 制作プロセス：町内の子どもたちにアンケートを取り、意見を反映させることで「可愛く目立つ」デザインを実現します。
- 名前の由来：季節の季語などを取り入れ、町の魅力を象徴するものとします（例：ぼたんちゃん、しろはまちゃん、うひょう君など）。

③ 特産品を活用した「移動販売型お弁当」の展開

アワビ、ボッケ、海苔などの豊富な特産品を全国的にPRするため、お弁当として販売します。

- 販売形態：固定店舗ではなく、キッチンカーや屋台をレンタルして活用します。これにより、初期費用を抑えつつ、都会などの多様な場所へ移動して町の魅力を直接発信できます。また、海の家などを作りそこでも販売して海水浴を楽しむと同時に美味しい特産品のお弁当を食べることができるようになります。海水浴ができない季節でもお弁当を食べに海に来るようになるというのが理想的です。
- 商品戦略：特産品（ボッケの唐揚げ等）を小さく切り分けるなどの工夫でコストを抑え、

子どもや学生でも購入しやすい「安くてボリュームのある」価格帯を目指します。

- 情報発信： YouTube チャンネルを開設し、お弁当や町の魅力を動画で広く発信します。

3. 期待される効果

これらの施策を通じて、夏以外のシーズンにも観光客が訪れるようになり、特産品の認知度が向上します。また、自分たちにできることから始めることで、町全体に活気が生まれ、「東北で一番小さい町でも、活気は日本一」という理想の町づくりに貢献できると考えます。

人口減少対策と空き地活用に関する提言

提言者： 汐見小学校 グループ2

赤間日向子議員、尾形恭佑議員、後藤里桜菜議員、
原崎勇吹議員、松山菜織議員、森悠都議員

【提言の背景と目的】

現在、七ヶ浜町では10年ごとに約1,000人ずつ人口が減少しており、将来的には町から人がいなくなってしまうのではないかという強い危機感を抱いています。この課題を解決し、若者や子育て世代に選ばれる「毎日が楽しくなれるような町」を実現するため、町内に増えている「空き地・空き家」の有効活用を軸とした以下の施策を提言します。

1. 若者・子育て世代向け公共施設および住宅の拡充

若者が住みやすい町にするための第一歩として、空き地を利用した環境整備を行います。

- 若者向け商業施設の誘致：若者が集まりやすい飲食店やカフェ、また生活の利便性を高めるための病院などを優先的に整備します。
- 住宅の増設と地元経済への還元：空き地へ新しい住宅を建設します。その際、地元の職人が建設に携わることで、町内での経済循環（予算の増加と再投資のループ）を生み出します。

2. 「貸し出しハウス（お試し移住施設）」の建設

移住を検討している人々が、七ヶ浜での生活を具体的にイメージできる場を提供します。

- 概要：空き地を利用して、ホテルや一時的に居住できる施設（一軒家やアパート形式など）を建設します。
- 立地：七ヶ浜の最大の魅力である海の近くに設置することで、町の魅力を最大限に体感してもらいます。
- 目的：実際に一定期間過ごすことで、移住へのハードルを下げ、人口減少の改善につながります。

3. 「お試し体験キッチン（シェアキッチン）」の創設

新たなビジネスの担い手を育成し、地域の活力を生むための拠点を構築します。

- 概要：初期費用や運営コストを抑えて飲食店経営などの挑戦ができる施設を建設します。
- 立地と集客：夏場の海水浴客などの観光客が多く見込める場所や、景色の良い場所に設置することで、観光客と創業希望者の交流を図ります。
- 効果：起業を通じたコミュニティ形成や、新たなビジネスチャンスの創出を促進します。

4. 期待される効果

これらの施策を通じて、若者や観光客を呼び込み、以下の「良い循環」を目指します。

- 経済の活性化： 若者や観光客が増えることで町にお金が落ち、経済が回ります。
- 予算の確保： 経済が活性化することで町の予算が増え、さらなる住民サービスや町づくりへの投資が可能になります。

七ヶ浜町の観光活性化に向けたキャンプ場建設に関する提言

提出者： 亦楽小学校 グループ1

佐藤碧人議員、村上太例議員、大石洋翔議員、内海こころ議員

1. 提言の背景と目的

七ヶ浜町の観光客数は、令和2年から3年にかけての新型コロナウイルス流行の影響を受け、減少傾向にあります。私たちは、この課題を解決し、再び多くの人に七ヶ浜を訪れてもらうために、町内に存在する「誰も住んでいない森林や豊かな自然」を有効活用したキャンプ場の建設を提言します。

2. 提案内容：多世代が楽しめる「滞在型観光拠点」の創設

単なる宿泊施設としてのキャンプ場ではなく、子どもから高齢者までが気軽に訪れ、楽しめる以下の施設を併設した拠点を提案します。

- 多様な宿泊・体験施設： 定番のテントサイトに加え、気軽に利用できるコテージや、他のキャンプ場にはあまりないアスレチックを設置します。
- 地元の魅力発信： 七ヶ浜の特産品などを販売する売店を併設し、地域の経済活性化にも貢献します。
- 理想とする環境： 鬼首の吹上高原キャンプ場のように、動物との触れ合いや川遊びができる、自然豊かな環境を目指します。

3. 建設候補地の提案

建設場所としては、以下の理由から「吉田浜」または「花淵浜」方面の森林エリアを推奨します。

- 選定理由： 土地が広く確保できること、そして七ヶ浜の最大の魅力である「海が見える」可能性が高いためです。
- 選定方法： Google Map を活用し、未使用の森林エリアを調査して検討を行いました。

4. 期待される効果

【ターゲットの拡大】

アスレチックやコテージを整備することで、子ども連れの家族や高齢者も安心して来場できるようになります。

【知名度の向上】

珍しい施設や豊かな自然が話題となることで、テレビなどのメディア取材を誘致し、町の知名度アップに繋がります。

【交流の創出】

年齢を問わず多くの人が集まることで、多世代間の交流が生まれる場となります。

私たちは「総合的な学習の時間」において、クラゲチャートなどを用いて町の課題を分析し、Canva等のICTツールを活用してこの計画を練り上げました。七ヶ浜町の素晴らしい自然という強みを活かしたこのキャンプ場が、町の未来を明るくする一助となることを願っています。

七ヶ浜町の海をきれいにし、観光を活性化するための提言

提言者：亦楽小学校 グループ2

小幡奏介議員、寺尾珠里奈議員、高橋梨央奈議員

1. はじめに（提言の背景）

私たちの町のテーマは「うみ・ひと・まち 七ヶ浜」であり、海は町の象徴です。しかし、現状ではその海が汚れていると感じており、実際に「全国海水浴場 汚い水質ランキング」において、菖蒲田海水浴場が233カ所中11位（B評価）という結果が出ています。海が汚いことは、観光客の減少や町の印象悪化に直結します。私たちは、海をきれいにすることが、住民の心地よさと観光活性化の両立に最も重要であると考え、以下の施策を提言します。

2. 具体的な提言内容

① ゴミ拾いポイントカード制度の導入

海で拾ったゴミの重量をポイントに換算し、町内で利用できる仕組みです。

- 内容： 拾ったゴミの重さに応じてポイントを発行する。
- 利用先： 七ヶ浜町内の飲食店や商店での買い物に利用可能とする。
- 対象： 町民だけでなく、観光客も含めた「誰でも」利用できるものとする。
- 期待される効果： 海がきれいになるだけでなく、町内での消費活動が促進され、地域の活性化につながる。

② 清掃機能付き水上バイクの活用

楽しみながら海を清掃するという、新しい発想の取り組みです。

- 内容： 水上バイクの後部にゴミ回収用の網を取り付け、走行しながら海面のゴミを回収する。
- 運用方法： 免許保持者や海をきれいにする活動団体への協力を依頼する。
- 期待される効果： 観光としての魅力（水上バイク）と環境保全を両立させ、観光客へのアピールポイントとする。

3. 「今すぐできること」への取り組み

行政の支援を待つだけでなく、私たちは以下の活動をすぐにでも開始すべきだと考えています。

- 啓発活動： ポイ捨てをなくすためのポスター制作。
- 清掃活動： 定期的な海のゴミ拾い活動の実施。

4. 町（大人の方々）へのお願い

これらの取り組みを実現するために、以下の点について協力を求めます。

- 資金面での協力： ポイント制度の運営や、清掃用具・設備の導入に必要な予算の確保。
- 広報活動への協力： この取り組みをより多くの人に知ってもらうための周知・PR。

- 専門的な協力：水上バイクの運転ができる有資格者の手配や、安全な運用ルールの検討。

海をきれいにすることは、七ヶ浜町の未来をつくる第一歩です。「うみ・ひと・まち 七ヶ浜」を輝く町にするために、私たちと一緒に取り組んでください。

七ヶ浜町の未来に向けた活性化策に関する提言
～四季折々のイベントを通じた交流人口の拡大と町の存続を目指して～

提言者： 松ヶ浜小学校 グループ1

伊藤夏明議員、佐藤瞳衣議員、高橋まりあ議員、中須賀柚人議員

1. 提言の背景と目的

現在、私たちの七ヶ浜町は人口減少と少子化という深刻な課題に直面しています。特に観光面では、夏場には多くの人々が訪れるものの、その他の季節の観光客が極端に少ないことが大きな問題です。このままでは町の活気が失われ、将来的に町が消滅してしまうのではないかという強い危機感を抱いています。そこで私たちは、一年を通じて観光客を呼び込み、将来的な移住・定住（人口増加）のきっかけを作るため「季節ごとの魅力的なイベント」の開催を提案します。

2. 四季のイベント案

年齢を問わず、町内外の誰もが楽しめる以下の4つのイベントを提案します。

- **【春】お花見キャンプ**
内容： 一般的なお花見に「キャンプ」の要素を掛け合わせます。
狙い： 他の地域でも行われている普通のお花見と差別化し、海以外の七ヶ浜の魅力をアピールすることで、滞在型の観光を促します。
- **【夏】砂浜バーベキューの解禁**
内容： 菖蒲田海水浴場などの砂浜において、期間限定でバーベキューを解禁します。
狙い： 夏の海の魅力を最大限に活用し、さらなる集客を図ります。
- **【秋】七ヶ浜「海の祭り」**
内容： 貝、アワビ、ボッケといった七ヶ浜自慢の海の幸や地酒を提供する屋台を設営します。
狙い： 「祭りは夏」という固定観念を覆し、秋の味覚をテーマに多世代が交流できる場を作ります。
- **【冬】肉フェス（ジュニア部門併設）**
内容： ソーセージの早食い大会など、子どもも大人も熱く盛り上げられるイベントを開催します。
狙い： 寒い冬にあえて「肉」というテーマで活気を生み出し、冬の集客の柱とします。

3. 運営および課題解決に向けた具体策

イベントの実施にあたっては、以下の運用案を提示します。

- **広報活動**： 七ヶ浜国際村でのパンフレット配布やポスター掲示により、宣伝範囲を広げ集客を目指します。
- **交通対策**： 飲酒を伴うイベントの際も安心して来場できるよう、期間限定でバス料金を安くするなどの利用促進策を検討します。

- 環境保全（ゴミ問題）： バーベキュー等のゴミ放置を防ぐため、条例によるルールの徹底とともに、イベントの一環として「ゴミ拾い大会」を同時開催するなどの対策を講じます。

4. 本提案の優位性

本提案には、以下の大きなメリットがあります。

【低コストかつ迅速な実行】

新たな建物を建設するなどのハード整備に比べ、イベント開催は費用が安く済み、計画から実行までの期間も短縮可能です。

【未来への第一歩】

たとえ最初は小さな効果であっても、まずは行動に移すことで、「未来の七ヶ浜町について真剣に考える人」を増やすきっかけになります。

何もしないままではなく、この提案を七ヶ浜町の未来を切り拓く「第一歩」として検討いただけるよう、強く要望いたします。

一年中観光客が訪れるにぎやかな「七ヶ浜」の未来に向けての提言

提言者： 松ヶ浜小学校 グループ2

伊藤音葉議員、後藤結之亮議員、中須賀稀愛議員、角田和磨議員

1. はじめに（提言の背景）

私たちは社会の授業において、タブレット端末などを活用して七ヶ浜町の現状について調査を行いました。その結果、私たちの愛する七ヶ浜町が抱える深刻な課題に直面し、このままでは町がなくなってしまうのではないかという危機感を抱きました。そこで、若者から高齢者までが希望を持てる「にぎやかな町」にするための具体的な施策を提言いたします。

2. 七ヶ浜町が抱える現状と課題

調査を通じて、私たちは以下の3点を主要な課題として認識しています。

- 観光客の少なさ： 海水浴シーズン以外に訪れる人が少ない。
- 少子高齢化と人口減少： 宮城県内の「消滅可能性都市（消滅の恐れがある自治体）」に含まれているという現状。
- 滞在時間の短さ： 菖蒲田海水浴場には年間約5万人の観光客が訪れますが、多くが海に入った後、食事や宿泊をせずにすぐに帰宅してしまっています。

3. 賑わい創出のための具体的提案

① 海の近くへの「温泉メインのホテル」建設

観光客が「立ち寄る場所」から「滞在する場所」へと変えるため、宿泊施設の建設を提案します。

- 建設地： ながすか多目的広場の空いた土地などを有効活用する。
- 施設内容： 温泉、リラックスルーム、遊び場を備え、若者から高齢者まで全世代が楽しめる施設とする。
- 地産地消の推進： ホテル内のバイキング等で七ヶ浜産の食材を積極的に提供し、食を通じて町の魅力を発信する。
- 着想の根拠： 既存の成功事例（サンピアの湯等）を参考に、幅広い世代が集まれる場所を目指します。

② 「七ヶ浜駅」の設置による交通網の整備

現在、町内に駅がなく、仙台駅や多賀城駅等からバスを利用せざるを得ない不便さを解消する必要があります。

- 目的： 交通の利便性を高めることで、観光客を呼び込みやすくする。
- 住民への恩恵： 観光客だけでなく、町に住む人々の生活の利便性向上にも直結させる。

4. 期待される効果と将来の展望

これらの提案が実現することで、以下のような好循環（価値の向上）が生まれると考えています。

- 観光客の増加により、七ヶ浜の魅力が広く伝わる。
- 「住んでみたい」と考える若者や移住者が増え、人口減少に歯止めがかかる。
- 観光客や居住者の増加に伴い税収が増加する。
- 増えた税収を活用してさらなる新施設を建設し、町の価値をさらに高める。

私たちは、自分たちで調べ、考え、この提案をまとめました。大好きな七ヶ浜町が、一年中たくさんの人で賑わい、将来にわたって存続し続けることを心から願っています。

小中学校体育館へのエアコン設置に関する提言

提言者：七ヶ浜中学校グループ1

佐藤大介議員、佐藤優月議員、熱海羽仁唯議員

1. 提言の趣旨

近年、地球温暖化の影響により夏季の気温が著しく上昇しており、本町の児童生徒の安全確保と充実した教育環境の整備が急務となっています。私たちは、学習・部活動の場、健康維持の拠点、そして災害時の避難所としての機能を強化するため、町内小中学校の体育館への空調設備（エアコン）設置を強く提言いたします。

2. 現状と課題

① 熱中症リスクによる活動の制限

調査によれば、暑さ指数（WBGT）が基準値の31を超えた日は令和5年度中の夏休み中は、17日中11日にのぼり、その大半で部活動が中止されています。暑さを避けるため、WBGTがあまり高くない朝に部活を始めるという工夫をしています。早朝練習は、生徒の身体的負担を増大させるとともに、活動時間が通常の3時間半から2時間半へと1時間短縮される事態を招いています。

② 競技パフォーマンスへの影響

特にバドミントン部などの室内競技では、風の影響を避けるために窓を閉め切る必要があります。室内温度が極めて高い過酷な状況で活動しています。練習機会の減少は、技術的な感覚を鈍らせ、生徒のパフォーマンス低下に直結しています。

③ 児童生徒の健康問題

宮城県は子どもの肥満度が高く、小学5年生の肥満傾向が全国1位、中学3年生の肥満傾向は全国2位となっています（令和6年度学校保健統計調査の結果）。夏季に体育館が使用できない状況は運動不足を助長し、さらなる健康被害を招く懸念があります。

3. 提言内容

① 計画的な空調設備の設置と財源の活用

文部科学省の「空調設備整備臨時特例合付金（設置費用の1/2が補助対象）」などを活用することを提案します。補助要件に断熱性の確保が含まれる場合、生徒の安全を最優先事項とし、断熱工事を含めた予算措置を講じてください。

② 段階的な対策の実施

本格的な設置に時間を要する場合は、当面の対策として、スポットクーラーや冷風機などの簡易設備を導入し、速やかな環境改善を図ることを求めます。

③ 地域の「クーリングシェルター（指定暑熱避難所）」としての活用

七ヶ浜町には、クーリングシェルターが2カ所あり、国際村と生涯学習センターが指定されています。しかし、生涯学習センターはまだしも国際村には行きづらく利用者もあまり見かけません。学校の体育館を地域の高齢者等も利用できる「クーリングシェルター」として開放することを提案します。生徒はフロア、町民はギャラリー（観覧席）を利用するなどのゾーニングを行うことで、地域全体の熱中症対策拠点とすることが可能です。

④ 災害時の避難所機能の強化

町内の学校体育館は避難所に指定されていますが、夏場の災害発生時に空調がない状態では、避難所内での熱中症や脱水症状の危険があります。安全・安心な避難環境の構築にはエアコン設置が不可欠です。

設置には多額の費用（一校あたり約3,000万～4,000万円）が必要であることは理解していますが、「お金よりも生徒の命と健康」を優先し、将来を担う子供たちが安全に活動できる環境を一日も早く整えていただくよう、切に願います。

実用英語技能検定（英検）の検定料全額補助の回数拡充に関する提言

提言者： 七ヶ浜中学校グループ2

黒澤颯翔議員、佐藤波輝議員

1. 提言の趣旨

私たちは、七ヶ浜町の未来を担う子どもたちが、経済的な懸念なく英語学習に励み、世界へ羽ばたく力を養える環境を整備するため、現在実施されている「英検検定料の全額補助」の回数を、現在の「年1回」から「年2～3回」へ拡充することを提言します。

2. 提言の背景と理由

① グローバル人材育成と町の発展

現在、七ヶ浜町では外国人観光客が増加傾向にあり、今後の町の発展には外国人労働者との協力も不可欠です。英語は世界の共通語であり、英検を通じて基礎を固め、外国人観光客を英語で案内できるような「案内人」を育成することは、AI時代においても「人情溢れるおもてなし」を伝えるために重要です。

② 経済的格差の解消と機会の平等

近年、英検の検定料は上昇傾向にあります。実際に、家庭の財政状況によって受験を諦めざるを得ない生徒が一定数存在しています。学びたいという好奇心がある生徒が、料金という枠に縛られず、平等に知識を広げる機会を持つべきです。

③ 「挑戦する心」を育む教育的視点

現在の予算（年間37万円）では、1回あたり12名程度しか補助を受けられず、希望者に対して到底足りていません。回数を増やすことで、たとえ一度失敗しても、その反省を生かして「再度チャレンジする力」や「学ぶ力」を損なうことなく、合格の可能性を飛躍的に高めることができます。

3. 提言の具体的内容

- 補助回数の拡充： 3級以上の検定料全額補助を、現在の年1回から、年2回（目標）または3回（理想）へと拡充してください。
- 対象級の維持： グローバルな交流に不可欠な「スピーキング（面接）」が加わる3級以上を重点的にサポートすることで、実践的なコミュニケーション能力の向上を図ります。
- 学習サポート体制の検討： 金銭的補助だけでなく、勉強方法がわからない生徒のために、町全体での学習サポート体制（勉強会など）の構築もあわせて検討をお願いします。

4. 期待される効果

- 英語力および他教科への波及効果： 英語力の向上だけでなく、挑戦と成功体験を繰り返すことで、国語や数学など他教科への意欲向上も期待できます。
- 郷土愛の醸成： 英語を武器に、姉妹都市プリマスとの交流や、町の魅力を世界に発信することで、将来的に七ヶ浜に残る人や移住者の増加に繋がり、過疎化の解決策の一つとなります。
- 将来の選択肢の拡大： 高校・大学入試での優遇だけでなく、カナダなど海外で働くことを夢見る生徒たちの将来の幅を広げることができます。

七ヶ浜町はグローバル化の人材育成に力を入れています。私たちの未来の幅を広げるため、子どもたちが世界へ羽ばたける明るい未来を実現させてください。

町が行う「自助」強化に関する提言

提言者：向洋中学校グループ1

菅原大空議員、我妻倅希議員、遠藤貴洋議員

1. 提言の背景と目的

本町において、災害時に自分の身を自分で守る「自助」の強化は急務です。その理由は以下の2点に集約されます。

- 高い高齢者率：町の人口のうち65歳以上の高齢者が26.6%と、4人に1人以上を占めています。
- 少ない昼間人口：働く世代の多くが町外へ通勤しているため、昼間に災害が発生した場合、町内に残る子どもや高齢者だけで対応しなければなりません。町外からの通勤者は自分の地域を優先する可能性が高いため、外部からの支援（公助・共助）が届くまでの「自助」が極めて重要となります。

2. 具体的な提言内容

① 「防災強化月間（11月）」の設置と一斉訓練の実施

- 防災強化月間の創設：自主防災訓練が集中し、「世界津波の日」もある11月を「防災強化月間」に指定することを提案します。6月（県民防災の日）と11月に、広報誌へ備蓄品のチェックリスト（食料期限や1人3日分の水があるか等）を掲載し、町民への意識付けを強化すべきです。

- 町内一斉防災訓練の実施：隣接する塩竈市のように、町内全域で一斉に訓練を行うべきです。災害は同時に発生するため、一斉訓練を行うことでより実践的かつリアルな対策が可能になります。

② 自助を支える公的補助の拡大

- 備蓄品への補助金：物価高騰の中で個人での備えには限界があるため、保存期間の長い食料品や、生命に関わる飲料水の購入に対して町から補助金を出すことを提案します。
- 家具固定補助の対象拡大：現在、高齢者等に限定されている「家具転倒防止器具の取り付け補助制度」を、若者世代や子どものいる世帯へも拡大することを求めます。

③ 小中学生にも分かりやすい情報発信

- ハザードマップの更新：現在のマップにある「TP（東京湾平均海面）」などの専門用語は子どもには難解です。小中学生でも直感的に理解できる言葉や表現への更新を提案します。

- 教育現場での活用：非常に狭い地域を対象とした「自分たちで作るハザードマップ」作成の授業を導入し、通学路の危険箇所や避難所への距離を体感的に学ぶ機会を増やすべきです。

3. 私たちの決意

私たち中学生は、学校での「総合的な学習の時間」を通じて、自助・共助・公助について学んでいます。まずは自分の身を自分で守る「自助」を徹底し、将来は災害時に高齢者や障害のある方をサポートできる「共助」の担い手として貢献したいと考えています。

町全体で「自助」の力をパワーアップさせ、いつか来る災害に備えることを強く提言いたします。